

2015 年 6 月 27 日

世界遺産を掘る 第 8 回 一下鴨神社一

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 近藤 奈央

はじめに

賀茂川と高野川が合流する三角地帯には、原生林の植生を残す糺の森が広がり、その中心には下鴨神社が位置します。下鴨神社は正式名称を賀茂御祖神社と言い、上社である賀茂別雷神社わかいかづらと合わせて賀茂社とも呼ばれています。両社は長岡京・平安京遷都以降、王城鎮護の社として崇敬され、勅祭である葵祭（賀茂祭）が執り行われています。

長い歴史を持つ下鴨神社境内では、史跡整備などに伴う発掘調査が進み、平安時代以降の様子がおぼろげながら見えてきました。境内に点在する祭祀遺構や神宮寺の遺構を紹介します。

1 下鴨神社の来歴

下鴨神社は、賀茂建角身命か も たけつぬみのみこととその娘である玉依媛命たまよりひめのみことを祀ります。上賀茂神社は、玉依媛命と乙訓郡の火雷神ほのかづらのかみ（松尾大社の大山咋神おおよまくいのかみ）との子である別雷神わかいかづらのみことを祭神とします。賀茂建角身命は、神武天皇の軍が熊野・吉野を越えて大和へ入るときに、八咫鳥やたがらすとなって先導を務めたとされます。『山城国風土記』逸文によると、賀茂建角身命は賀茂県主の祖であり、大和の葛城から山城に進出し、山城国を治めたといわれます。一方、『鴨氏始祖伝』によると、鴨氏は複数おり、葛城と葛野の賀茂氏は別の氏族といい、現在でも定説をみていません。

社伝では、崇神天皇 7 年みづがきに瑞垣の修理が行われた記録があることから、これ以前には創建されていたが、天平神護元年（765）に上社からの分流が認められたのが始まりという説もあります。奈良時代以降は、神階の授与、賀茂祭の勅祭化、賀茂斎院の設置、上皇・天皇の行幸など、朝廷からの崇敬を集めました。鎌倉時代以降、賀茂斎院制度の廃止や戦乱によって荒廃しますが、江戸時代前半に式年遷宮などが再興され、現在に至ります。

2 発掘調査の概要（図 1）

平成 2 年度から、調査が十数回にわたって行われており、様々な成果が得られています。

① 本殿周辺

2008c-2 地点（図 2）：南北方向の柱列。時期は江戸時代。柱間 2.1 m 等間の 3 間で、根石を据える。寛永年間作成の『下賀茂社堂舎絵図』に描かれた本殿を囲む玉垣に相当？

2008c-3 地点（図 3）：東西方向の築地基底部分。幅約 0.6 m、長さ 1.85 m 以上、高さ 0.2 m。北・南面に石を並べて土留めとしている。『下賀茂社堂舎絵図』には、大炊殿の北端から三井社の築地へと延びる東西方向の「練築地」が描かれている。時期は江戸時代。

2009 地点（図 4・5）：高さ約 1 m の石を縦に据え付けた石列。北東から南西方向に約 5 m にわたって 7 石を確認。東側に平坦面が揃う。石の底面の標高は、現御手洗川底とほぼ同じ。寛永 5 年（1628）以降の遺構とみられ、旧御手洗川西岸の可能性はある。

② 旧奈良の小川（図 6）

1990-2 地点：室町時代末以降の瀬見の小川。現在の川幅より広く、位置はほぼ現在と同じ。時期不明の石敷遺構は小川両岸で検出され、水辺の祭祀のための祭壇であったとみられる。旧奈良の小川と瀬見の小川の合流地点付近の様子が判明。

1991-2 地点：平安時代から鎌倉時代の流路。旧奈良の小川が平安時代に造られたことが判明。小川埋土上面で、江戸時代の埋納土坑を検出。刀状鉄製品が土師器皿 2 枚に挟まれた状態で発見された。旧奈良の小川は江戸時代に埋められたことが明らかとなった。

2000・2001 地点：旧奈良の小川全体を検出。護岸施設のない素掘りで、人工的に造られた。小川の勾配は非常に緩やかで、泉川から一定の高さで水を引き込んでいた。平安時代後期にはすでに造られており、江戸時代前期頃に埋め戻された。その後、現在北側に位置する奈良の小川へ付け替えられたとみられる。『下賀茂境内之絵図（寛文古図）』から、寛文年間（1661～1672）までに移設されたと考えられている。現参道の東半から、南北方向の石組遺構を検出（図 7）。東西幅 2.4 m。両端に石列があり、内側を砂で盛土。平安時代後期以降から江戸時代初頭までの仮設建物である帳屋の地業とみられる。現参道の中心付近で集石遺構を確認（図 8）。鎌倉時代から安土桃山時代。直径 0.5 m、深さ 0.3 m の円形。拳大の石を埋納。参道に伴う祭祀遺構？

2004a・2005 地点：平安時代後期の祭壇状遺構、石敷遺構、祭祀遺構（図 9）。祭壇状遺構は石敷きを行った上面に精良な黄褐色の盛土を行った遺構（図 12・13）。この上で、集石遺構などを検出していることから、何らかの祭祀が行われていたとみられる。石敷遺構は祭壇状遺構の盛土が後世に流出し、地業の部分のみ残存した遺構（図 11）。石敷遺構 2 では、立石遺構と石を埋納した箱状の石組遺構を検出（図 14・15）。また、祭壇状遺構上では江戸時代の祭祀遺構も確認（図 10）。

③ 船島（図 16）

2007・2008b 地点：船島は旧泉川の中州状地形に盛土と整地が行われ、12 世紀代に現状に近い形となった。盛土の中には多量に土器が含まれており、境内や島での祭祀で使用された土器とみられる。最下層で古墳時代の流路を数条確認。泉川の旧流路。船島南端で検出した江戸時代後期の石組井戸（図 17）は、内法直径 1 m、深さ 1.7 m。最下段と中程で大型石を使用。また、埋土が中程で変化することから、中程より上を後世に積み足している可能性がある。『烏邑縣纂書』うそんあがたさんしょ（下鴨神社所蔵）に記述のある雨乞いに使用された井戸の可能性はある。

④ 神宮寺（図 18）

2014a-1 地点：江戸時代後期の建物跡、路面、溝。観音堂の須弥壇推定位置で礎石を検出（図 20）。雑舎の礎石の一部が並ぶ。解体時に廃棄された瓦集積の位置から、建物位置を推定。観音堂の北に雑舎、同南の一段下がったところに、東西方向の溝と路面。路面は西から日吉社へ至る参道とみられる。

2014a-3 地点（図 19）：江戸時代の堀跡、溝、礎石。東西方向の基壇状高まりの北面に石列が並び、中央付近に礎石とみられる石が据えられていた。基壇状高まりの南側に東西方向の溝。その南で、雑舎の礎石を検出。

2014a-4 地点：北に開くコの字状の石列。時期は江戸時代以降。周辺を江戸時代に盛土し、整地をしてから、掘り窪めて石を並べる。大正から昭和初期の古写真（下鴨神社所蔵）によると、社が西を正面にして建っている。中井家の指図には西面する日吉社が描かれており、同一のものの可能性が高い。南北方向の石組溝(図 22)。3～4 段分の積まれた石が残存する。幅 1 m、深さ 0.8 m、時期は江戸時代。『御祖社社参図』（享保 13 年）の観音堂東側に描かれた池から新糺池への導水路跡の可能性はある。

2014c-5・6 地点（図 21・23）：江戸時代の池跡。中島、汀を検出。汀は調査区北端で、南面した東西方向の石列。緩やかに弧を描きながら、調査区外の北へ向かう。南北方向に直線的な西側の汀には、護岸石が認められないため、もともと設置されていなかったとみられる。中島は 6 トレンチ南北方向の中央付近で検出。大型石が構築土の主体をなす。現地形の張り出し部分がほぼ江戸時代の中島に相当するとみられる。中島裾部では石列を確認していない。池は大量の江戸時代瓦や遺物の入った土で埋められていた。また、5 トレンチ西半では、平安時代後期の瓦堆積層や基壇状盛土を確認。基壇東端は南北方向。化粧石や側溝などは検出していないことから、亀腹状基壇を想定。神宮寺の塔の記録から、多宝塔の可能性はある。

3. まとめ

・境内の一部を調査したにすぎない。瀬見の小川や泉川岸辺の様相がまだ明らかではなく、神宮寺建物跡の位置や塔跡とみられる遺構の規模が確定していない。

・平安時代後期や江戸時代の遺構が多く、中世の遺物や遺構が希薄。中世の下鴨神社の様相がいまだ不明。

・土器や石を使用する祭祀と、痕跡の残りにくいものを使用する祭祀の違いが認められる。

＜参考文献＞

『鴨社の絵図』財団法人糺の森顕彰会事務局、1989 年
『糺の森整備報告書』宗教法人賀茂御祖神社、2010 年
『日本の古社 賀茂社 上賀茂神社・下鴨神社』淡交社、2004 年
小松武彦『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2009 年
小松武彦・田中利津子『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2011 年
近藤奈央『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2006 年
櫻井みどり『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2005 年
櫻井みどり・津々池惣一『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2003 年
平尾政幸『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-19 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2008 年

表 1 賀茂御祖神社略年表

和 暦	西 暦	主 な 出 来 事
天平勝宝 2 年	750	御戸代田一町を奉られる
天平神護元年	765	朝廷より、上社からの分流を認められる
宝亀 11 年	780	鴨瀬宜真髪部津守ら 11 人に賀茂県主の賜姓
天応元年	781	賀茂上下両社瀬宜・祝等に把笏の許可
延暦 3 年	784	長岡京遷都。従二位の神階を授受
延暦 13 年	794	平安京遷都。正二位勲一等に叙せられる
大同 2 年	807	正一位の神階、賀茂祭が勅祭となる
弘仁元年	810	賀茂斎院の設置
弘仁 10 年	819	勅によって、賀茂御祖・別雷の 2 神の祭が中祀に準ずる
天禄 2 年	971	摂政右大臣藤原伊尹の参詣〔摂政（関白）賀茂詣の始め〕
寛仁 2 年	1018	上下賀茂社に愛宕郡八郷が寄進され、下社に四郷分与
長元 9 年	1036	式年造替制の開始
承保 3 年	1076	白河天皇の行幸。毎年四月中申日の御阿礼日を行幸式日とする
建暦 2 年	1212	賀茂斎院制度の廃止、鴨長明『方丈記』を著す
文明 2 年	1470	応仁・文明の乱の兵火によって、社殿・糺の森焼失
文亀 2 年	1502	賀茂祭の行粧中止
永正 14 年	1517	御蔭祭の行粧中止
寛永 5 年	1628	正遷宮の履行
元禄 7 年	1694	賀茂祭・御蔭祭の再興
文久 3 年	1863	孝明天皇、御造営を幕府に命じる
昭和 18 年	1943	賀茂祭、路頭の儀中止
昭和 28 年	1953	本殿 2 棟（文久三年造替）を国宝、35 棟を重要文化財指定 賀茂祭、路頭の儀再興
昭和 31 年	1956	賀茂祭行列に斎王代・女人列復興
昭和 58 年	1983	賀茂御祖神社境内が国の史跡指定を受ける
平成 6 年	1994	「古都京都の文化財」として世界文化遺産に登録

表 2 下鴨神社神宮寺略年表

和 暦	西 暦	主 な 出 来 事
天長 10 年	833	岡本堂（神宮寺の前身）が建立される
寛弘 2 年	1005	賀茂下御神宮寺にて諷誦を修める
保安元年	1120	東御塔の木作始
大治 3 年	1128	崇徳天皇、東御塔の供養
天承元年	1131	待賢門院御願による西塔供養
保延 4 年	1138	神宮寺および西塔の焼失
仁平 2 年	1152	瀬宜惟文、多宝塔（西塔）を供養
延宝 3 年	1675	大火によって、河合社、鴨社神宮寺が類焼
宝永 5 年	1708	神宮寺および撰社日吉社炎上、日吉社は後に相殿となる
慶応 4 年	1868	神仏分離令による神宮寺の解体、堂塔の撤去

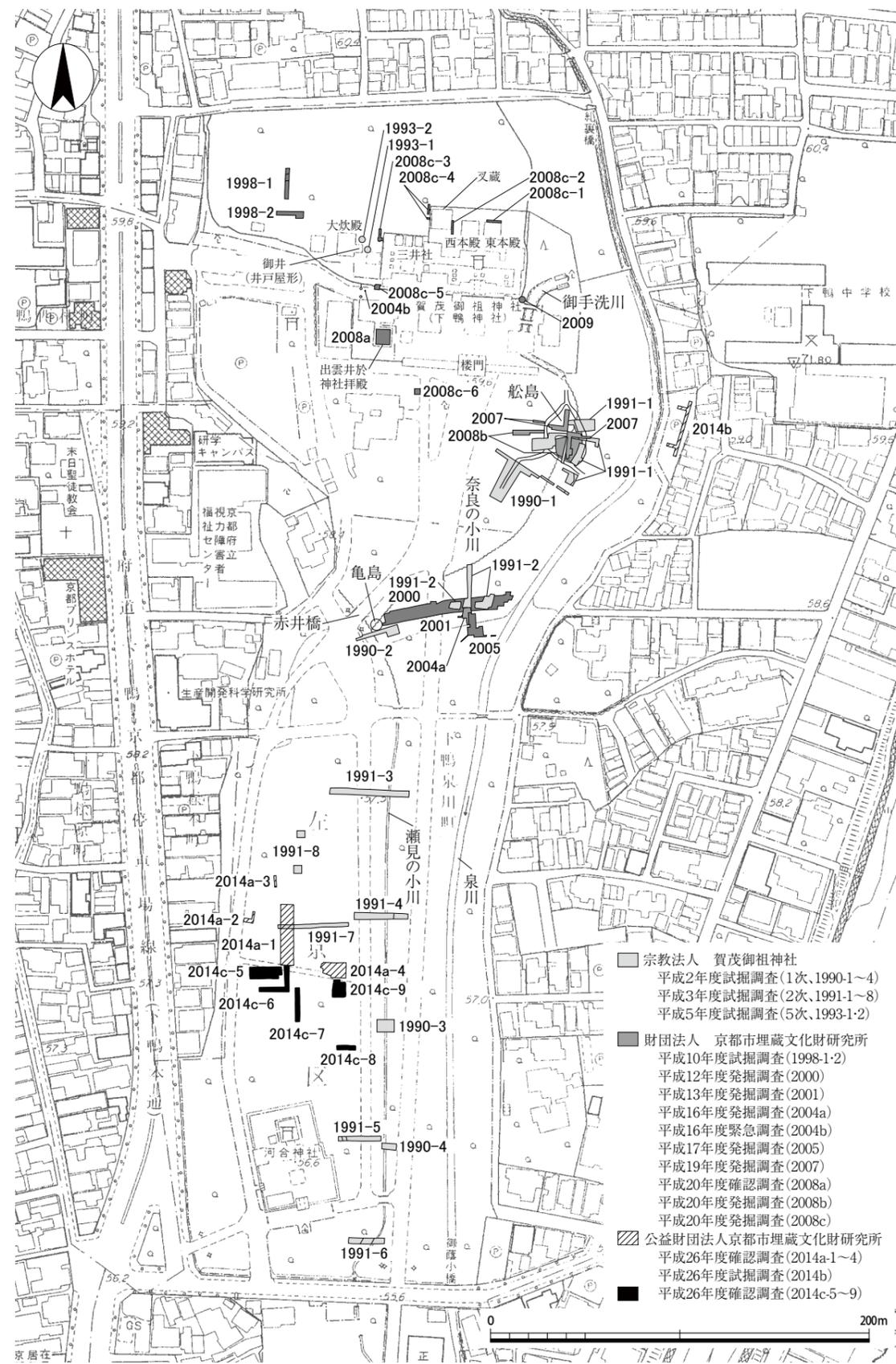


図1 調査地位置図(1:3,000)

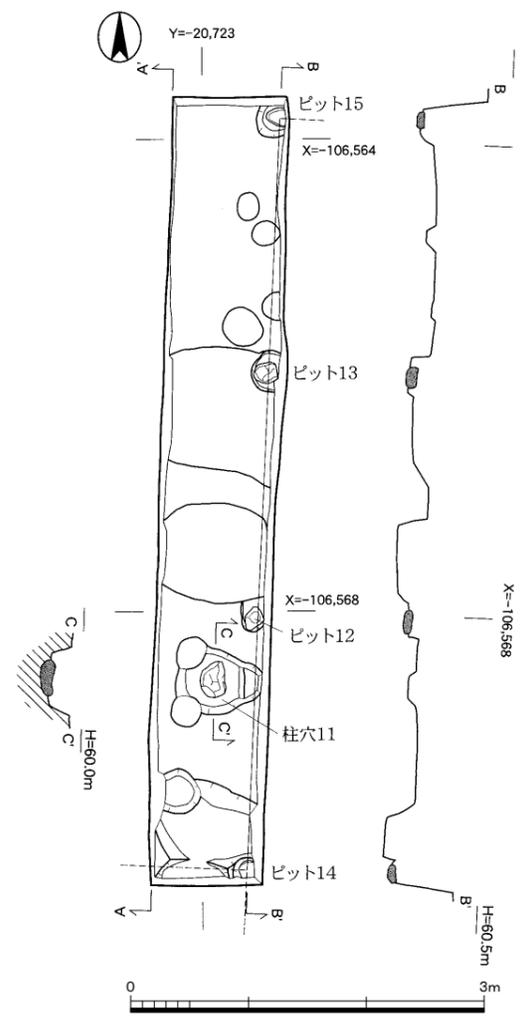


図2 2008c-2地点:柱列実測図(1:60)



図4 2009地点:石列(南西から)

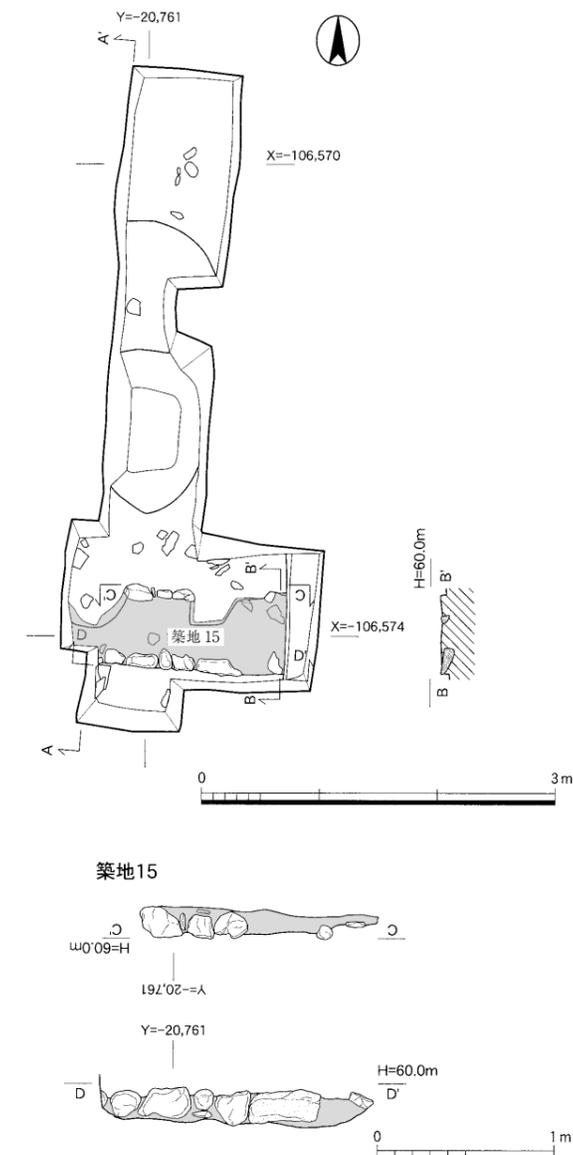


図3 2008c-3地点:築地実測図(1:60, 1:40)

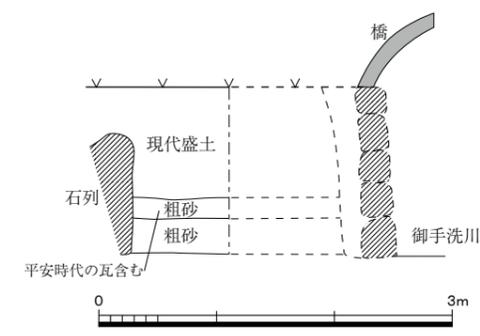


図5 2009地点:石列模式図(1:60)

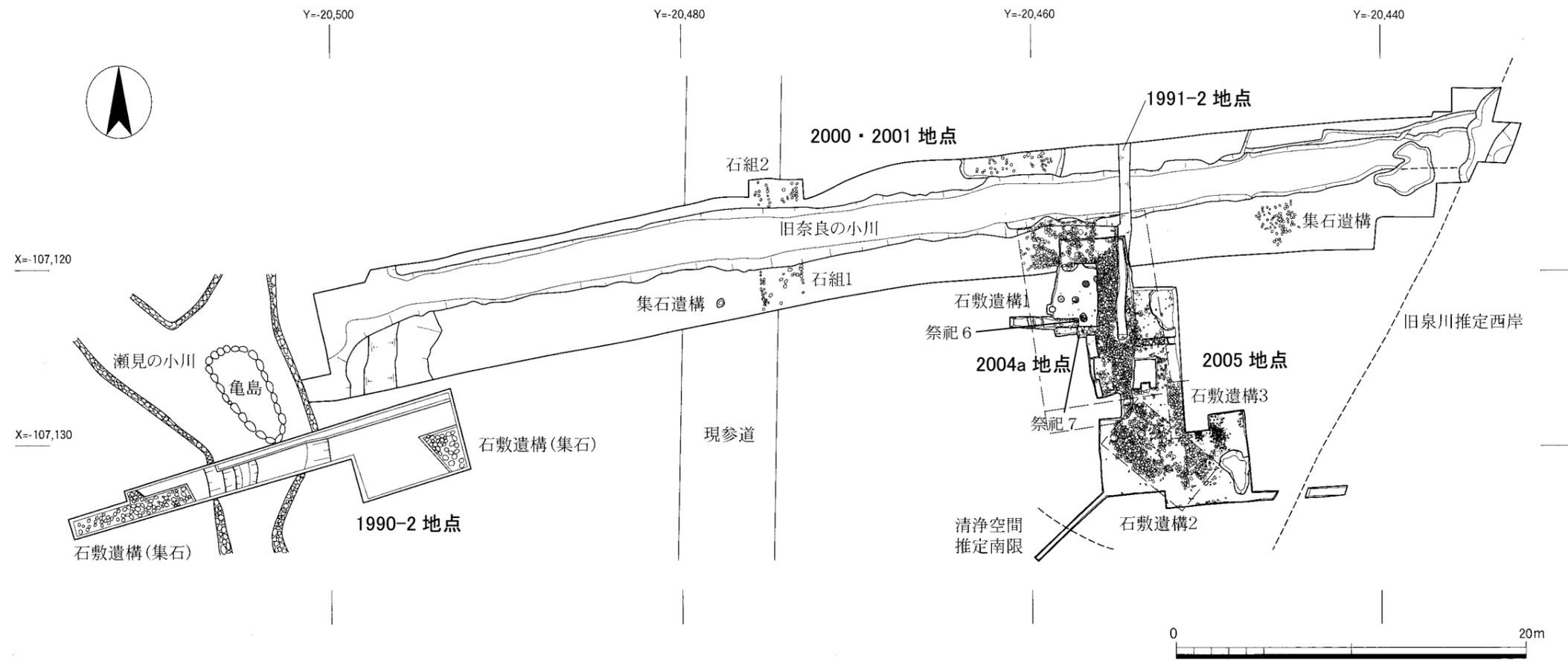


図6 旧奈良の小川周辺調査区配置図(1:300)



図7 2000・2001地点:石組1・2(南から)

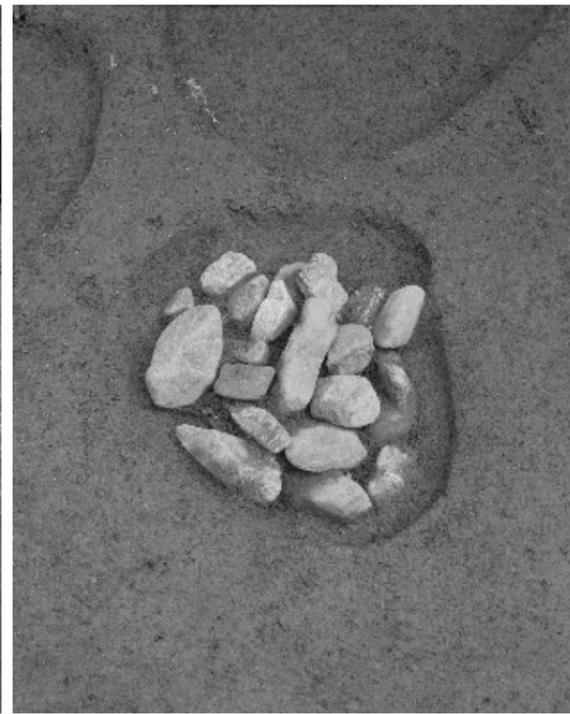


図8 2000・2001地点:集石遺構(北から)



図9 2004a地点:祭祀7(北東から)



図10 2004a地点:祭祀6(南から)



図11 2004a・2005地点:石敷遺構1・2平面図(1:150)



図12 2004a地点:石敷遺構1断面(北東から)

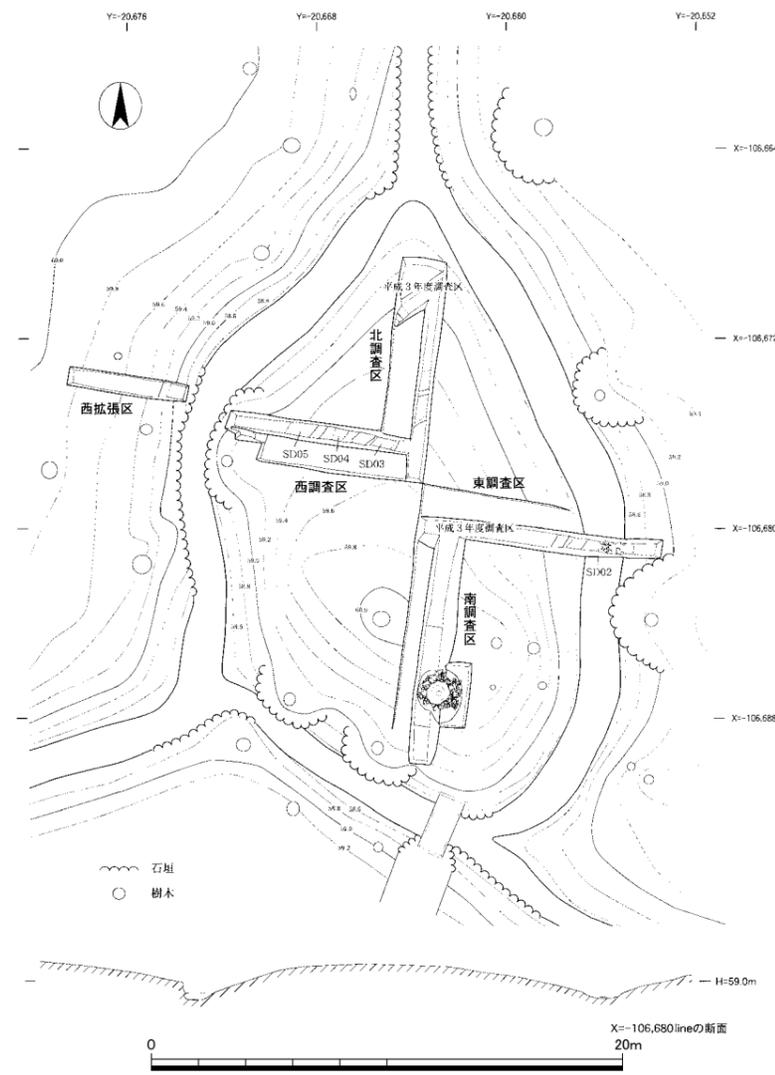


図16 2007・2008b地点:船島実測図(1:300)

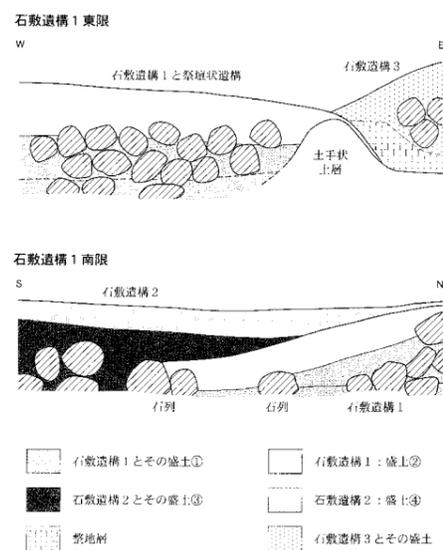


図13 2004a・2005地点:
石敷遺構1東限・南限模式図

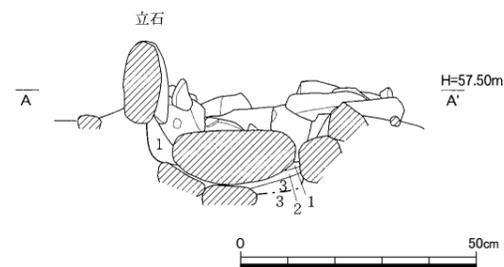


図14 2005地点:
立石遺構1断面図(1:15)

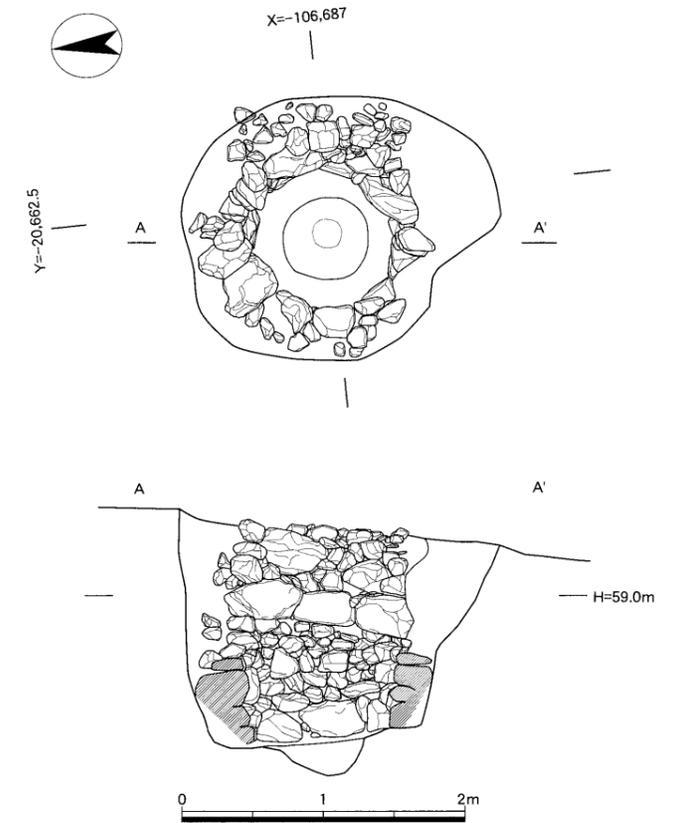


図17 2007・2008b地点:井戸実測図(1:50)

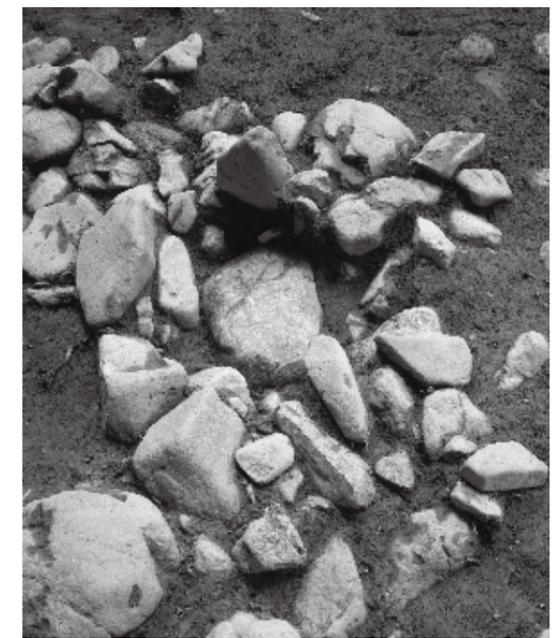


図15 2005地点:立石遺構1(南東から)

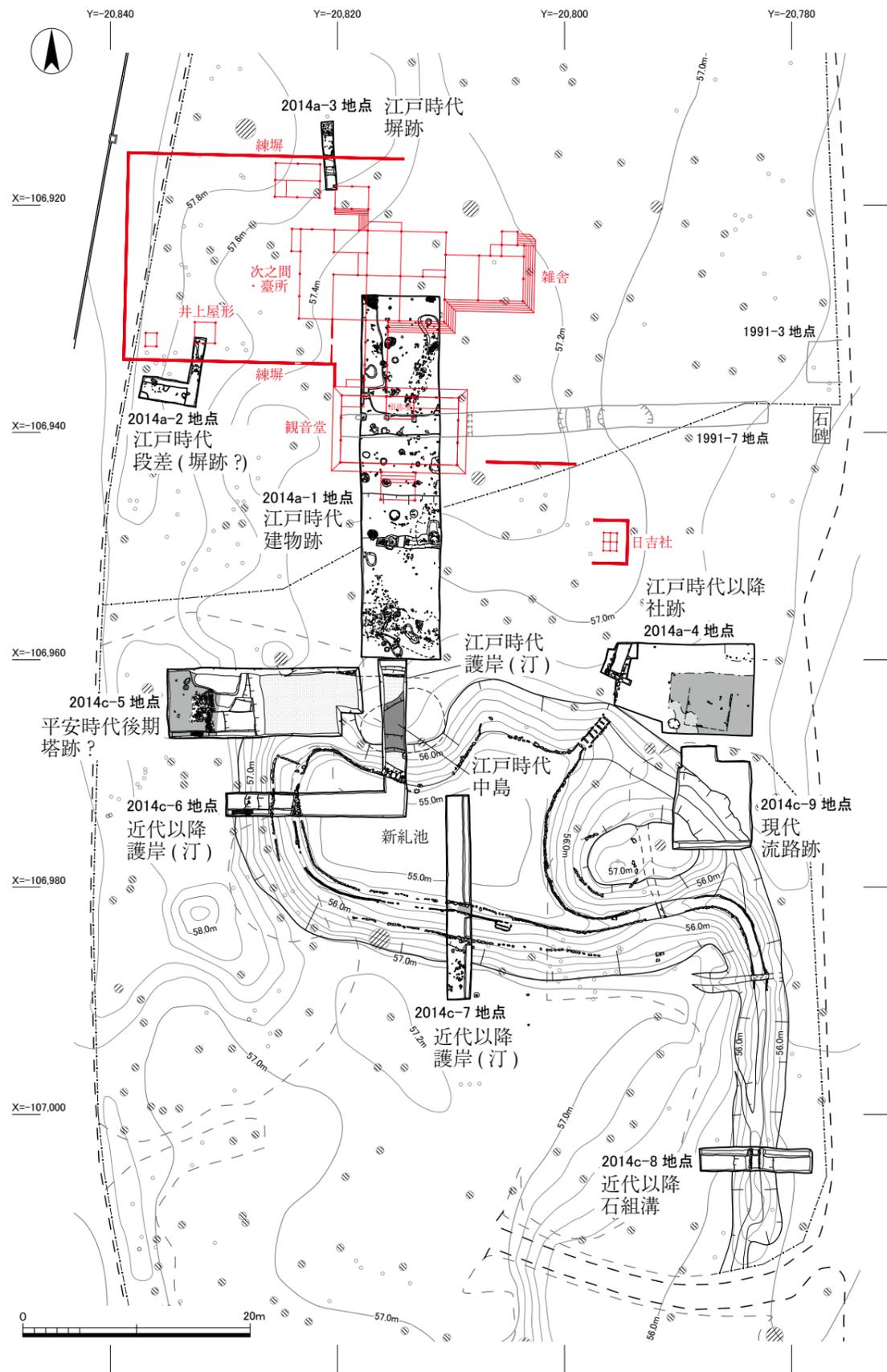


図18 神宮寺跡周辺調査区配置図(1:500)

※一般財団法人建築研究協会が作成した「神宮寺復元平面図 縮尺1/150」を縮小・加筆した。

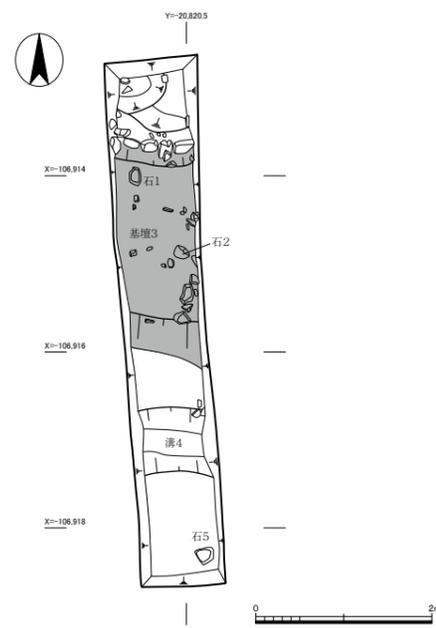


図19 2014a-3地点:平面図(1:80)



図20 2014a-1地点:礎石検出状況(南東から)



図21 2014a-6地点:江戸時代池跡(南から)



図22 2014a-4地点:石組溝(北東から)

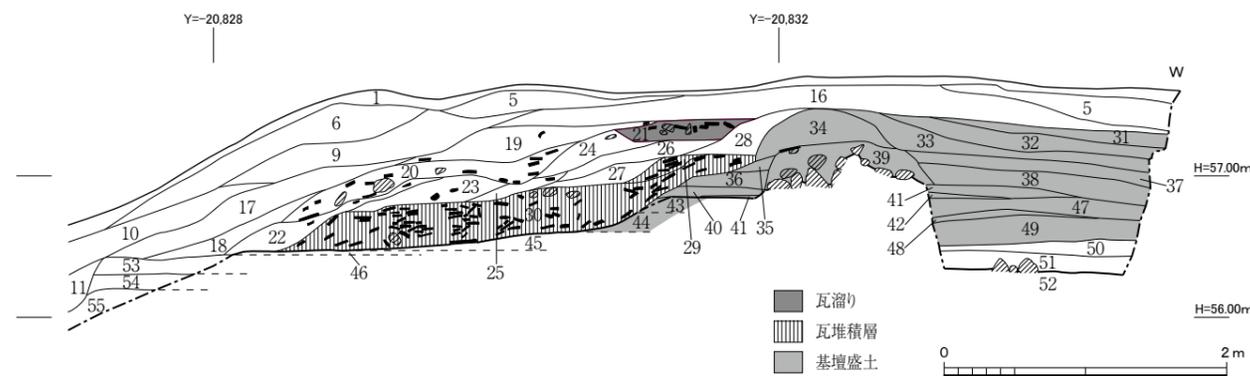


図23 2014c-5地点:南壁断面図(1:50)